

# 「彩の国」わいたま特集



代表  
取締役  
**長谷川 健太郎氏**



県知事を表敬訪問



県の特産品や文化を描いた  
パッケージもあった

## この人に聞く

日東食品株式会社（桶川市大字加納）は埼玉県大豆を100%使用し平成11年

から学校給食、さらには病院、ホテルなど業務用に特化し地産地消を実現している県内唯一の納豆メーカーである。埼玉県は来年、熊谷市がラグビーW杯の12開催都市の一つに選ばれており、同社製品には県マスコットキャラクター「バト」

田清司県知事を表敬訪問す

るなど、長谷川社長は地域活性化に積極的だ。納豆で谷川社長に話を聞いた。

「平成30年から大豆品種は『里のほほえみ』となっただ。大粒で納豆向きの大

豆を販売するが、どうしてこんなに多くの方に支持していただいているのか？」

「『彩の国なつとう』は学校給食で毎年約80万食を供給している。埼玉県の7~15歳人口が約60万人だから単純計算すると1年あたり約1~3回の供給である。これを学期に1回は納豆を食べる機会を持つてほしい」と私は思っている。

「幹部候補生学校卒業後も千葉・館山で哨戒ヘリコプターのパイロットとして勤めていた。家を経営しては飛行隊長から『必要とされる所で力を尽くせ』と言われたことを今でも覚えており自分はその言葉に後押しされた。納豆業界も全てで景気が良いわけがない。

後継問題はどの業界でも大きい課題だが、継ぐか継がないかはその人がどういう決断をしたのかにかかっている。当事者の「やるか、やらなか」の意志・覚悟が尊重されるべき『良い、悪い』と周りが言うことで

白菜、キャベツ、白瓜、最近では野沢菜の生産にも取り組む。他産地との情報交換を活発に行い漬物製品ㄨカ一だけなく惣菜向けにも原料を供給している。関東一円とのパイプを持つため注目は高まっている。現在は20町歩以上の農地を生産管理するまでに成長した。深谷市も他地域と同様に農家の後継者不足に悩まされているが、利根川と荒川に挟まれた肥沃な台地



今年4月に行われた野沢菜の収穫



しゃくし芋は今年も順調な出荷量となった

このように栽培品目も増やしている久保田社長は「生産者と製品メーカーの両方の立場を理解する。一体となりやっていくためには何すべきかを考えやつていきたい」と常に先を見据えている。

## 品質、安心安全へのこだわり

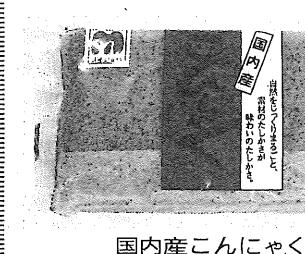
の追い風になつていて、全国納豆協同組合連合会加盟企業は約120社と減少の一途を辿っている中で継続的にPRが大切なのは言うていただきたい。一方で最近は納豆の健康機能性が認められ消費量も伸びている中、極小や小粒だけでなく、中粒、大粒の商品も人気が出ており消費者にも納豆の

栽培に適しているためだ。地産地消を重視する中で生産者との関係を大事に中心にひきわり納豆の人々が「豆の健康機能性が認められており消費者にも納豆の

豆の健康機能性が認められており消費者にも納豆の

豆の健康機能性が認められており消費者にも納豆の

豆の健康機能性が認められており消費者にも納豆の



国内産こんにゃく



かのこ入りこんにゃく



下仁田小巻き

と語り毎日現場と向き合って、それでも年々作付けを増やすなど意欲的である。また、今年は葉物野菜としては野沢菜の生産にも着手した。

やしている久保田社長は「生産者と製品メーカーの両方の立場を理解する。一体となりやっていくためには何すべきかを考えやつていきたい」と常に先を見据えている。

と語り毎日現場と向き合って、それに惣菜向けの蒟蒻や白瀧で引き合いで、を中心に多數揃えている。蒟蒻製品について埼玉県

蒟蒻製品について埼玉県